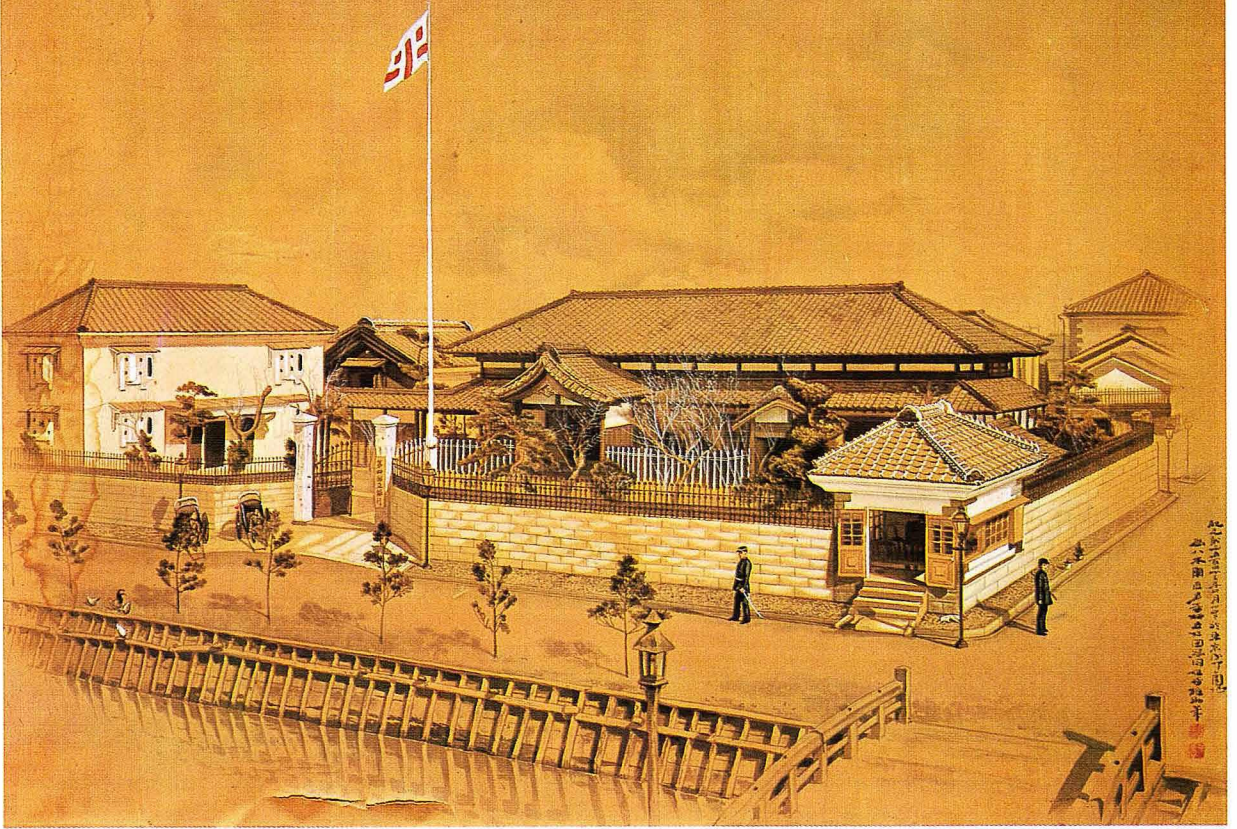


明治6年に下付された創立当初の開業免状

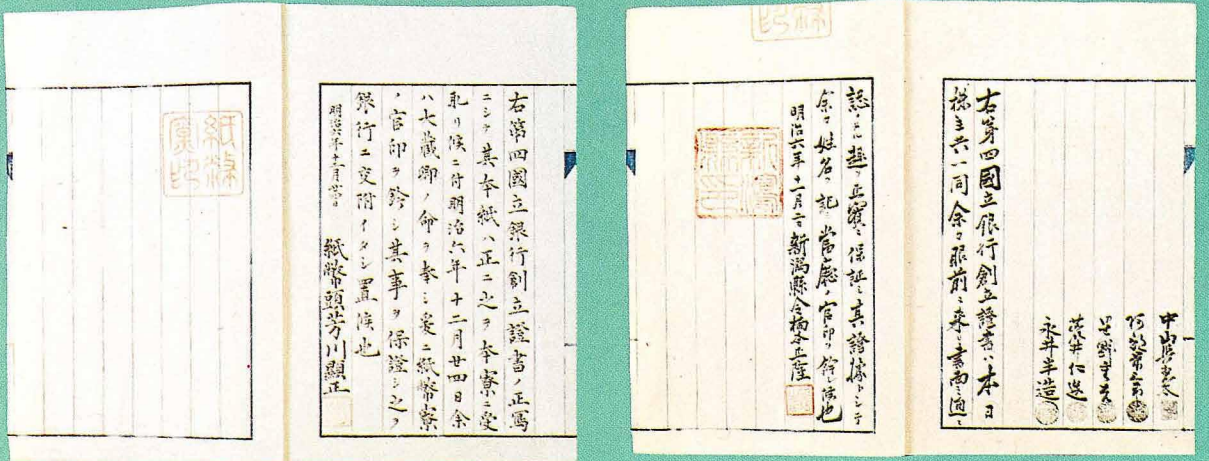


明治9年国立銀行条例改正により下付された開業免状

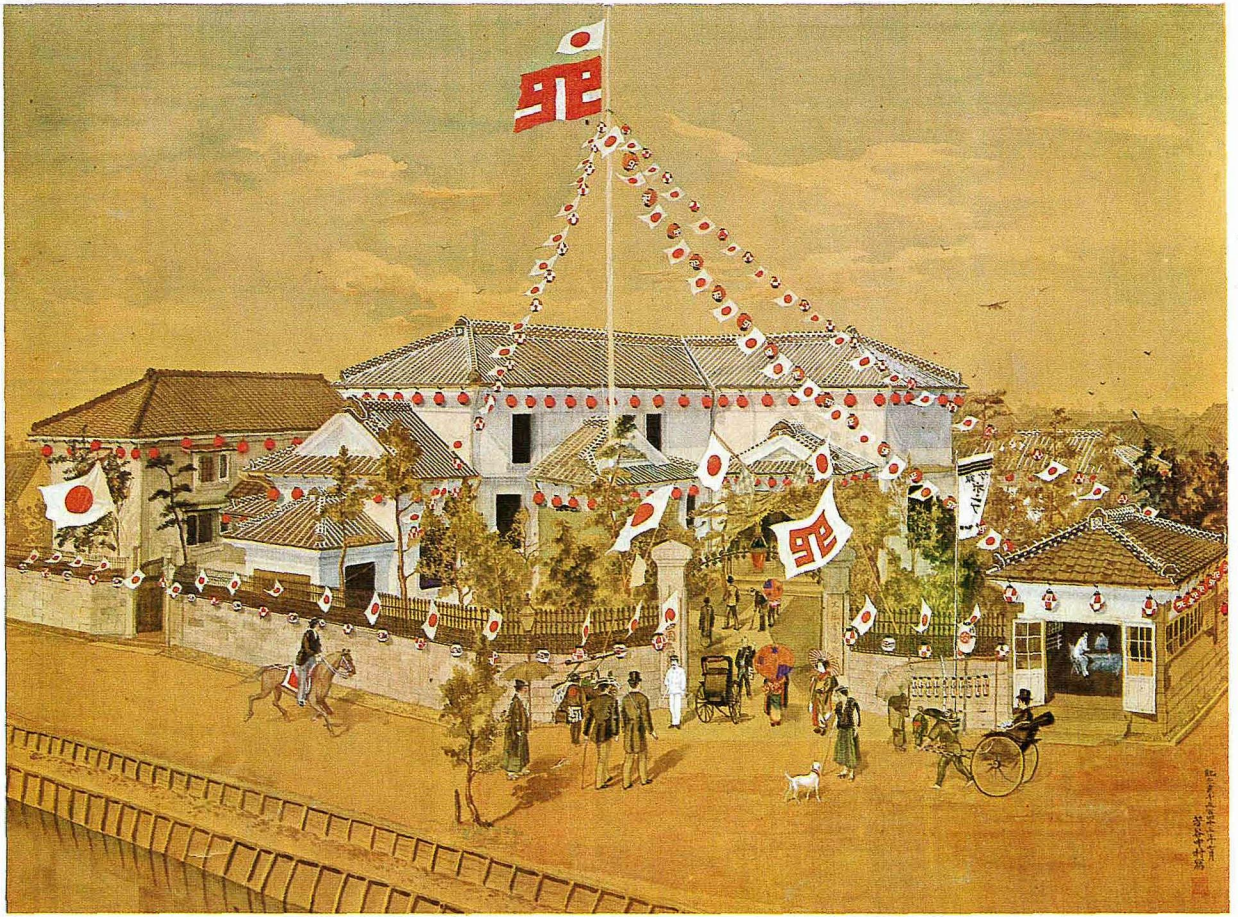
第一卯國立銀行家屋舊園



創立当初の本店



明治6年11月2日作成の創立証書

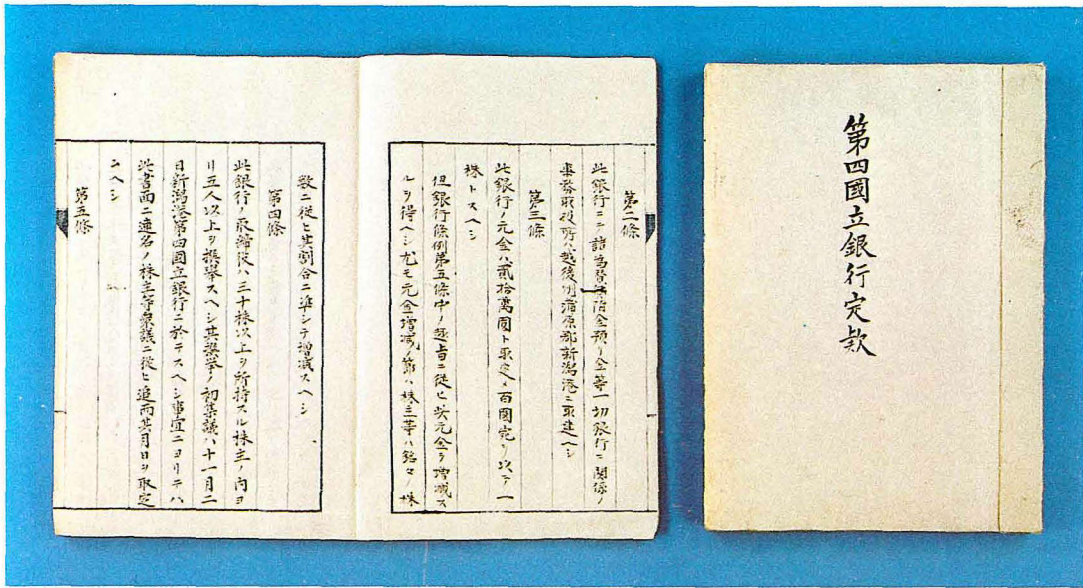


明治15年新築の本店

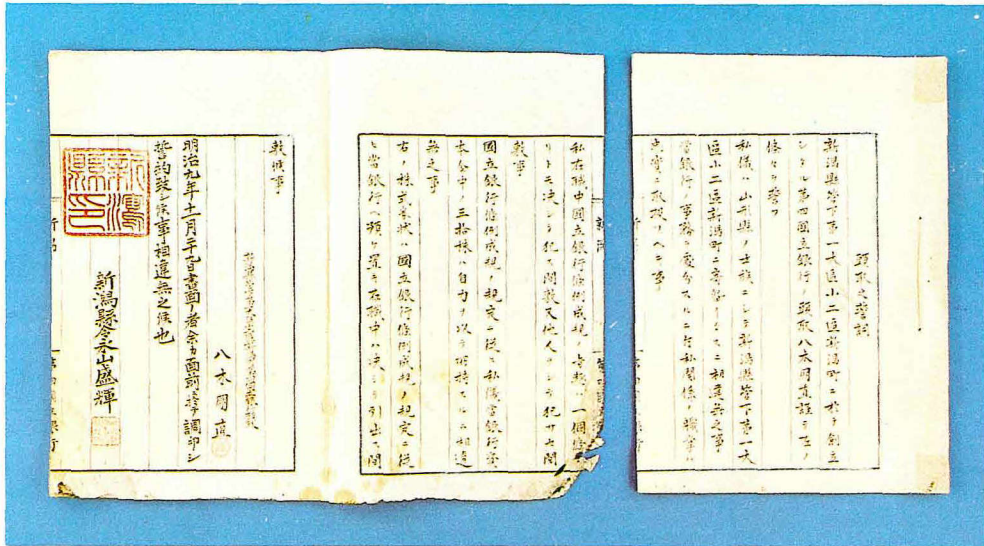
株主名		宿所	株金	株数
市島徳六郎		東京國島屋敷	六千五百圓	六株
白峯長衛		同 同 同 同	六千五百圓	六株
西脇清三郎		同 同 同 同	二千圓	二十株
同 同 同 同		同 同 同 同	三千圓	三十株
同 同 同 同		同 同 同 同	五千圓	五十株
同 同 同 同		同 同 同 同	五千圓	五十株

第四国立銀行創立證書
 大日本政府、公債證券、引當、シテ紙幣、發行シテ
 通用シ、之ヲ引當ニシテ、明治十五年八月五日大日本政
 府ニ於テ制定シ、シテ銀行條例、趣意ニ基テ第四国立銀
 行、創立シ、其商業、經營シ、謀リ、此證書、第四国立銀
 行、居、シ、其者、其協力シ、シテ、此、社、結、ビ、在、創立證書、取
 候、シ
 第一條
 此銀行、左、辨、ニ、第四国立銀行、稱、ス、ヘシ
 第二條
 資本金、額、ハ、金、其他、ノ、業、ヲ、經營、ス、ヘ、此、銀行、ノ、公、債、趣
 意、州、府、縣、新、道、運、送、業、通、シ、取、定、ス、ヘシ
 第三條
 此、銀行、ノ、元、金、ハ、二、十、萬、圓、ニ、テ、百、圓、ヲ、以、テ、一、株、ト、定、
 貳、千、株、ニ、分、割、ス、ヘシ
 第四條

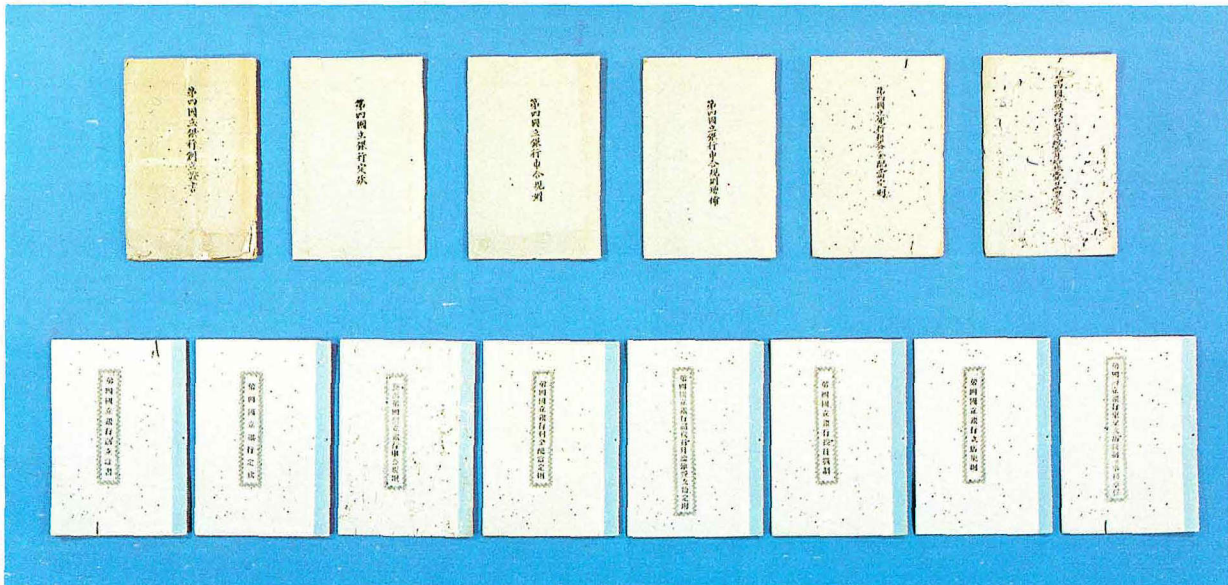
株主が連署捺印し、県令、紙幣頭の奥書き、官印の捺印を受けた



創立当初の定款



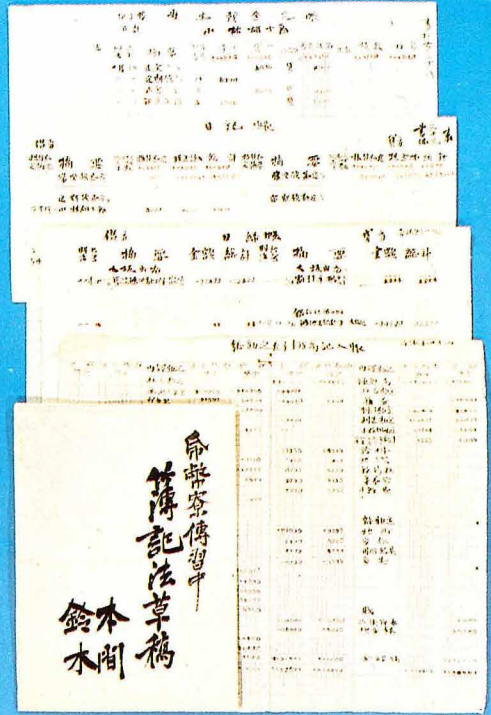
国立銀行時代の頭取、取締役が差出した誓詞



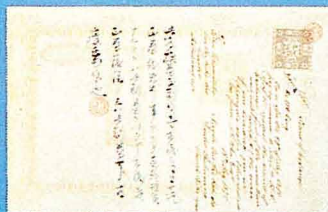
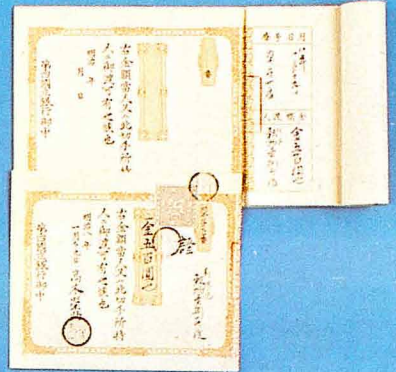
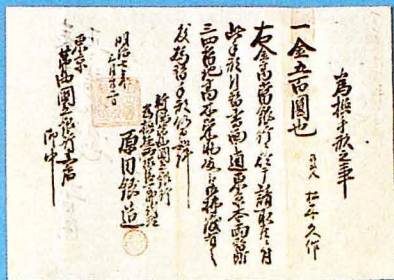
印刷された諸規定類（上段は明治7年作成, 下段は9年改訂のもの）



第四国立銀行の株券（上は明治7年，下は10年発行）



開業に先立って伝習を受けた洋式簿記の草稿



国立銀行時代初期の手形類と，当行で最初に使われた当座小切手帳(上)，当座預金通帳(右)





第四国立銀行発行の5円紙幣
 田植の図および稲刈の図(表面)
 日本橋の図(裏面)



明治時代の硬貨



第四国立銀行発行の2円紙幣
新田義貞脱刀海神に祈る図および児島高德桜樹題詩の図（表面）
城楼の図（裏面）



第四国立銀行発行の1円紙幣
田道與羽征伐忠死の図（表面）
蒙古襲来の図（裏面）



行章の由来

当行の行章は、創立に先立って制定され、明治7年1月13日、紙幣寮に届出たものである。第一国立銀行が行章を定めたのにならって作られたが、その誕生に際しては、次のようなエピソードがあった。

創立準備のため上京した在京委員は、東京神田の辻金五郎の邸を宿舎としていたが、7年1月のある夕べ、宿で柿の実を賞味しながら行章の意匠を凝らしていた。同席していた辻が柿の横断面からヒントを得て、白紙を切り抜き、朱椀の上に広げ、「是れ豈光彩四隅を爛射する太陽の形象にあらずや。亦以て第四銀行の前途を祝福するに足らん」と提案し、大いに賛同を得て行章が生まれたという。 (稿本『第四銀行六十五年史』より)

